玉勝間

作者

本居宣長

享保十五（一七三〇）年～享和元（一八〇一）年。初め小津氏、後に本居氏と称した。名は栄貞、幼名は富之助、号は春庵（舜庵とも）など、書斎号は鈴屋。伊勢の国松坂の木綿商人小津定利の長男。宝暦十二（一七六二）年に結婚した妻勝子との間に長男春庭がいる。

松坂の商家に生まれたが、学問や和歌を好み、家業に適せず、医学を志して、宝暦二（一七五二）年から京都に遊学し、同七年に帰郷して医者を開業した。京都遊学中は、医学を堀元厚・武川幸順に学ぶ傍ら、朱子学者で荻生徂徠の古文辞学にも造詣の深い堀景山について儒学を学び、その影響もあって契沖の著書に接し、国学への関心を深めた。帰郷後も国学の研究に励み、同八年に「源氏物語」や「古今和歌集」などの古典の講義を開講、同十三年頃には「紫文要領」「石上私淑言」、さらに歌論の「排蘆小船」などを著した。宝暦十三（一七六三）年には、上方旅行中の賀茂真淵と松坂の宿で面会し、その古代精神究明の学に共鳴して入門、「古事記」の研究を終生の業と定めた。その成果が結実した「古事記伝」全四十四巻の刊行は寛政十（一七九八）年に完了するが、この文字どおりのライフ・ワークとなった研究を通して、国学を体系づけ、大成した。著作は多岐にわたるが、古典文学関係のものに「万葉集玉小琴」「美濃の家づと」「古今集遠鏡」「源氏物語玉の小櫛」など、語学関係に「詞の玉緒」「字音仮字用格」「漢字三音考」や上田秋成との論争をまとめた「呵刈葭」など、歌集に「鈴屋集」、随筆関係に「玉勝間」「うひ山ぶみ」などがある。

出典

▼底本

日本思想大系「本居宣長」（吉川幸次郎他校注、昭和五十三〔一九七八〕年、岩波書店）によった。文化九（一八一二）年刊行の板本によっている。

▼成立

起筆の時期は一の巻最初の章に、「けふはむ月十八日、子の日なれば」と記しているので、寛政五（一七九三）年一月十八日である。寛政七年に第一編が出版され、以後各編を三巻ずつとして寛政九年に第二編、寛政十一年に第三編、文化元（一八〇四）年に第四編、文化九（一八一二）年に第五編が刊行され、この時点で既刊分も含めて五編十五冊が売り出された。第四・五編は宣長没後の出版で、かなり刊行に手間取っている。享和元年に亡くなる前まで、書き継いでいたと考えられる。なお、板本以前の草稿本の存在が指摘されているが、それは寛政元年秋・冬頃の起筆と推定されている。

▼書名

一の巻冒頭に、「言草のすずろにたまる玉かつまつみてこころを野べのすさびに」という宣長の詠んだ和歌が載せられている。書名はこの和歌に由来するもので、「言草が折々にたまる、美しい竹籠」の意である。「万葉集」に用例がある上代語で、いかにも宣長らしい命名なのである。

▼内容

随筆。十四巻および目録。各巻には必ず「初若菜」「桜の落葉」などのように、内容とは無関係に四季の植物にちなんだ巻名が付けられ、巻頭の第一章にそれぞれの巻名の心を詠んだ風雅な歌文を配している。全体は千五章から成り、折に触れて思いつくことを書くという方法なので、その配列に深い意味は見いだせない。その内容は種々雑多であるが、大まかに二つに分類すると、古書からの抄録（「愚管抄」「東鑑」など）、門人などからの聞書（田中道麿・小篠敏など）、古典注釈・古語の語義、地理・歴史の考証などの実証的な研究と見られるものが一群ある。もう一つは評論的姿勢で執筆したもので、古書に関する批評（「宇津保物語」など）、学問論・古書論、折々の随想などであるが、研究と評論とが明快に分けられるわけではなく、両者が絡み合って一章を構成するものもある。

実に範囲が広く、それでいて奥の深い随筆で、宣長の学識の広さと深さを改めて感じさせる。他の著述は領域・方法などがある程度定められているのに比して、そういうものに拘束されない自由さが、学問や信仰・趣味などを対象にさせる原動力になり、本書の価値を一段と高めているのである。しかも、研究の進展した現在においても学問的意義のある説が多く見られる。その中でも、特に自己の学問形成を体験的に書いた章、師の賀茂真淵などについて述べた章、漢意を批判した章などはよく知られている。

文章は平明な擬古文で書かれ、理屈に偏らず、情緒にあふれ、考証・学術的な随筆の代表と呼ぶにふさわしい作品と言えよう。

参考文献

※教師用

▽本文・注釈書・現代語訳

日本古典文学大系「近世文学論集」　中村幸彦　岩波書店　昭四十一

「本居宣長全集」一〇巻・別巻二　大野晋他　筑摩書房　昭四十三〜五十二

日本の思想「本居宣長集」　吉川幸次郎他　筑摩書房　昭四十四

日本の名著「本居宣長」　石川淳他　中央公論社　昭四十五

新潮日本古典集成「本居宣長集」　日野龍夫　新潮社　昭五十八

▽研究書・その他

「本居宣長」　小林秀雄　新潮社　昭五十二

「本居宣長」　吉川幸次郎　筑摩書房　昭五十二

「本居宣長」　城福勇　吉川弘文館　昭五十五

「覚書き日本の思想」　寺田透　岩波書店　昭五十八

「宣長と秋成」　日野龍夫　筑摩書房　昭五十九

岩波セミナーブックス「『源氏物語』入門」　阿部秋生　岩波書店　平四

※生徒用

日本古典文学大系「近世思想文集」家永光郎他　岩波書店　昭四十一
「玉勝間　上・下」（岩波文庫）村岡典嗣校訂　岩波書店　昭六十二
「本居宣長」（新潮文庫）小林秀雄　新潮社　平五
「本居宣長事典」本居宣長記念館編　東京堂出版　平十四
「本居宣長とは誰か」（平凡社新書）子安宣邦　平凡社　平十八
「本居宣長『うひ山ぶみ』」（講談社学術文庫）白石良夫　講談社　平二十二
「本居宣長」（中公新書）田中康二　中央公論新社　平二十六
「やちまた」（中公文庫）田中康二　中央公論新社　平二十七

図版解説　**〈本居宣長〉**

神宮徴古館所蔵。昭和十二（一九三七）年制作。一幅。一五一×一八一センチ。望月春江（一八九三―一九七九）筆。山梨県生。作風は日本伝統的流れに立もので、堅実な写実を基礎とし、琳派や近代的感覚を投入した花卉図等は重厚にしてかつ新鮮な特色を示した。

⇩P99